

丹波焼の里 ミュゼシター

発行：やきものの里プロデュース倶楽部

2020
autumn
winter
vol.
28

丹波の手仕事 匠の技 14

延年窯 「白丹波」 市野 年成氏
正大氏

「丹波立杭陶磁器協同組合」
ができて 70 年

インタビュー
日本工芸会正会員って？

西端 正氏
市野 悦夫氏
清水 一二氏



市野年成 作 白丹波花文鉢



最近では白丹波はもとより、漆を釉薬として使い陶器面の一部にテクスチャーとして塗り、強制乾燥して定着させた作品も制作されています。正大氏は、天目釉の発色を研究されており、年成氏とは違った目線で丹波を盛り立てておられ、年成氏は「各々が独自に発展して行ってくれば良い」とやさしい眼差しを向けられました。後継者も立派に成長された安堵感と、親子三人で作陶して行く情熱を、温かな話し振りの中より感じました。

延年窯 市野年成・正大

〒669・2135

丹波篠山市今田町上立杭449・1

電話 079・597・2212

文 吉村美穂子 写真 迫田隆

丹波の手仕事

匠の技 14

延年窯「白丹波」 市野年成氏・正大氏

梅雨湿る午後、鮮やかな橙赤色の凌霄花に誘われるように延年窯へ着くと、市野年成氏とご長男の正大氏の出迎えを受け、兵庫陶芸美術館を眺望出来る、最高のロケーションのギャラリーに案内して頂きました。とても大きなオブジェから白丹波の皿、ワイングラス、茶碗、壺等、古典的な伝統作品から現代的で斬新な物まで、見事な作品が展示されています。年成氏は大学を卒業後、昭和46年に京都醍醐寺の横に工房を構える岩淵重哉氏に内弟子として師事され、四年間の内弟子生活を終えて26歳の時丹波に帰って白丹波に関わろうと思われました。岩淵氏は塩釉を主とした「白」を作陶されており、年成氏は「以前より好きだった、白」に惹かれ師匠の「白」に大いに影響され、白にこだわるようになったと言われます。その後昭和58年・35歳の時より大阪芸術大学で教鞭を取られ、平成31年春に35年の教員生活を終え、現在はご子息二人と共に作陶に勤しんでおられます。

白丹波と呼ばれる技法を用いた製品が江戸時代には盛んに作られていましたが、明治の頃になると一度途絶えてしまいました。丹波の土は黒の発色が良いので、丹波と言えは「黒」と言っ事となり、昭和40年頃まで丹波では、白丹波は誰も作らなくなっており、年成氏は岩淵氏との出会いもあり、もともと白が好きだったので、白丹波の作陶を始められました。丹波の土は焼成すると赤茶色になるので、それに白を施して白い生地を作り、そこへいろいろな技法（鉄絵・染付・赤絵・葉型文等）により装飾を加えて白丹波を確立されました。18世紀の頃は丹波の近辺で白い土の層があり、それを探取して作られていましたが、現在は埋蔵量も少なく天草陶石や蛙目などを精製して、白い土を作り、鉄分の多い丹波の土に塗り白い素地を作っています。「白丹波も還元焼成すると、磁器の様な真っ白に出来上がるが、酸化焼成だと柔らかく、少し黄味を帯びた白になるので、還元焼成の白の方が好きだ」と言っておられました。



市野正大 作 陶漆鉢

「丹波立杭陶磁器協同組合」ができて70年

800年以上にわたり窯の炎を絶やすことなく現在に伝え、日本六古窯の一つに数えられる「丹波焼」は兵庫県の中東部、丹波の国の西南端に位置し、播磨・摂津との三国境にある緑豊かな自然に恵まれた里で、現在およそ60の窯元があります。「丹波立杭陶磁器協同組合」は昭和25年に設立され今年70年を迎えました(組合員は50窯元)。主な事業としては組合

新型コロナウイルス禍で秋の陶器まつりは中止。新しいチャレンジを感謝の気持ちで模索中...

「お客様への感謝の気持ちで始めた陶器まつりは毎年2日間で10万人以上が来てくださいます。中止になり残念ですが、違った形でロングランで開催し、同時に週末を利用してなにかできないかと考えています。昨春に一日限定で開催した軽トラ市は各窯元が各々一台の軽トラに商品を

り良質の土の製造など地道にやっています。坯土工場ができたのは昭和38年。土作りは重労働で器づくりの作業の半分くらいを占めていました。坯土工場ができて、窯元は製作に専念することができるようになったと聞いています」



組合坯土工場

展示しお客様には窯元と会話しながら器を選んでいただきました。今年は夏に延期されましたが雨の中たくさんのお客様が来てくださり、本当にありがたかったです。たとえば陶の郷で数軒ずつの窯元が順番に分散して陶器市のような形で出店するか。また、お正月の「福風呂敷」は毎年陶の郷で販売していただいており、好評をいただいております。来年は密にならない事業の一つです。

「向、今後の事業につきましては新型コロナウイルスの感染状況により変更となる場合もあります。公式ホームページでご確認ください。取材 上田智津子 写真 迫田 隆



丹波伝統工芸公園 立杭陶の郷

丹波立杭陶磁器協同組合の歴史

昭和12(1937)年	「丹波陶器工業組合」設立 共同販売・共同購買を行う
昭和23(1948)年4月	兵庫県神戸工業試験所立杭支所開設(後の兵庫県立工業試験場)
昭和25(1950)年9月	「丹波陶磁器協同組合」設立 12月設立登記 組合員42人
昭和26(1951)年	陶製酒樽を開発 後年業界生産額の過半を占める
昭和32(1957)年3月	丹波立杭窯(作窯技法)が国の無形文化財に指定(選択)
昭和35(1960)年4月	町制施行により、「今田村」から「今田町」へ
昭和38(1963)年	組合坯土工場設置 原料土共同購入、陶土精製の近代化、組合員へ供給開始
昭和44(1969)年4月	今田町立丹波焼陶芸会館開設 管理運営を組合が受託
昭和48(1973)年4月	三田市四ッ辻で原土採取用地購入
昭和53(1978)年	「丹波立杭焼」国の伝統的工芸品として、通商産業大臣の指定を受ける
昭和53(1978)年11月	陶器市開催。翌年からは「丹波立杭焼陶器まつり」として毎年開催
昭和54(1979)年2月	丹波立杭焼伝統工芸士認定
昭和60(1985)年6月	名称を「丹波立杭陶磁器協同組合」と改称 今田町立丹波伝統工芸公園「立杭陶の郷」開園
昭和63(1988)年4月	陶の郷内に観光物産センター完成、組合陶器即売場・陶芸教室を開設
平成2(1990)年3月	陶の郷内に登り窯築窯、「平成窯」と名付け初窯焼き
平成6(1994)年9月	組合坯土工場改築 陶土精製設備改善
平成11(1999)年4月	多紀郡4町合併により「篠山市」誕生
平成12(2000)年11月	組合設立50周年記念事業実施
平成17(2005)年7月	観光物産センター(窯元横丁)リニューアルオープン
平成18(2006)年4月	篠山市指定管理者として「陶の郷」運営を受託
平成19(2007)年5月	第1回丹波焼「春のものがたり」開催
平成26(2014)年～	最古の登り窯修復事業(平成26年度～27年度)
平成27(2015)年4月	篠山市が日本遺産認定(丹波焼構成文化財)
平成27(2015)年11月	最古の登り窯初焼成
平成27(2015)年12月	篠山市がクラフト&フォークアート分野で、ユネスコ創造都市ネットワークに加盟
平成29(2017)年4月	丹波焼含む日本六古窯が日本遺産認定
平成30(2018)年1月	丹波焼で地域団体商標登録
平成30(2018)年12月	組合坯土工場 陶土精製設備改善
平成31(2019)年4月	第1回丹波焼軽トラ市開催
令和元(2019)年5月	丹波篠山市に市名変更
令和元(2019)年12月	組合坯土工場メンテナンス、新機材導入

源泉かけ流しの日帰り天然温泉



緑に囲まれた広い露天風呂でゆったり、のんびり、ほかほか。農産物直売所、軽食コーナーも併設、1日ゆっくりお過ごしください。



◆入浴料◆
大人 700円
(12歳以上)
小人 300円
(6～11歳)

営業時間

AM10:00～PM10:00 (PM9:30 受付終了)

定休日 毎週火曜日(祝日は営業)

〒669-2153

兵庫県丹波篠山市今田町今田新田 21-10

TEL.079-590-3377

<http://yume-konda.com/>



日本工芸会正会員って？

日本工芸会正会員

西端 正氏

市野悦夫氏

清水一二氏

司会…日本工芸会の陶芸部門の正会員が丹波篠山市に12名おられます。どのようになると日本工芸会正会員に認定されるのですか。

清水…「日本伝統工芸展」に4回入選すると正会員に認定されます。以前は連続で4回入選と聞いていたのですが、今は通算の入選回数が条件になっています。

司会…いろいろ公募展があります。公募展で4回入選と聞いていたのですが、今は通算の入選回数が条件になっています。

西端…私の場合、父の影響がありまして、焼き物屋をやるといふことは公募展への出品もするんだと自然に感じてました。父は日展の方に出していましたが、自分がやりたいと思っていた仕事と伝統工芸展の展覧会の目的や考え方が比較的近いのかなあと。最初は入選とかには箸にも棒にもかかりませんでした。

市野…20代の頃は展覧会というのは意識なんてないし、こんなもんがあるんかと思ってたんですけど、僕たちより20歳ぐらい上の西端末晴さん世代の、大上昇さんや市野信水さん、市野省三さんとかが日展や伝統工芸展の本展に出してはったんで。僕の初入選は41歳でした。初めて出したのが本展で拾ってもらえて、嬉しかったですね。

清水…私は最初立杭で勉強させてもらって、それが一段落した後瀬戸へ行かせてもらいました。瀬戸はその当時結構力のある産地で、行かせてもらった窯元の周りには、日展や日本工芸会の偉い先生方がおられました。その後ちょっとだけ備前に行かせて頂いたときの先生が、正会員だったことも理由の1つです。初めて本展に出したのは西端さんが日本工芸会総裁賞を取られた1989年。悦夫さんや皆さん入選しておられるんですが、私一人通らなくて、そこから初入選まで15年かかりました。ようやく入選させて頂いた正会員になって、今は工芸会というもののや、会の中のことを勉強させて頂いてる

ところ。司会…日本伝統工芸展の最高賞を受賞されたときはどんな思いでしたか。

西端…本来なら自分が作り続けた仕事を出品して、入選していくのが自然なんです。そのときは取って私には難しいだろうなという仕事に挑戦しました。それがたまたま認められたというところで、常に新しいことに挑む気持ちはありました。

市野…西端さんが最高賞を取られて2年後、僕が本展の初入選した年には、元和さんも初入選で最高賞に近かったです。

清水…私は30代ぐらいになった頃ですと、百貨店などで個展するというのがすごい憧れやっただけで、百貨店の美術画廊で個展をするためには「せめて支部展ぐらい通つてくたさい」と言われて。今の30代の人って、結構ギャラリさんからぼつと声がかかるので、伝統工芸展や日展に出して入選して会員だ会友だという看板を背負わなくてもいいという感覚になつてきていくのかなと思います。

市野…今は映像や画像であらゆる世界中の作品が見られますよね。抽象的な品物なり、幅広い評価を受けて、そういう人はさらさら公募展に出す意識もないやろし、それに画廊なり企画する側がアピールするなど選択肢が広いんですね。

清水…今はもう悦夫さんがおっしゃったようなSNSを使った発信っていうのを自分一人で作るから。ただ工芸会にいましたら、日本中のいろんなところの会員さんたちとお話をしますと、丹波という産地でやっていると知らないことはいっぱいあるわけです。同じものを作るにしてもアプローチの仕方が違うことを勉強させてもらう機会はあるって、そういう繋がりというのはいくらもなかった組織のものすごくいい部分だと思ふんです。

司会…今後こうあってほしいというふうな思いはありますか。

西端…私は、好きにやったらいいんじゃないかと思うんです。今の時代に合ったやり方で一杯やっけてほしいなあと考えています。それを長い間そういうことを続けること、丹波の伝統というのには生まれるのかなあと考えています。公募展に挑戦して入選したりすると大きい自信に繋がります。

市野…人間っていろいろの一面ではないから、機械文明が進むほど農業とかこういう素朴なものに惹かれる人が一部だけでもいる。やっぱりそういう人が続けてくれればと思います。

清水…こういう公募展や伝統工芸展に出すというのは西端さんがおっしゃったように通れば嬉しいです。少し落ちれば悔しいです。次どうしようと考えたりする、そういうメリハリをつけるための一つのツールなのかなという気がします。出す以上は入選したいわけですから、それに向かって考えます。それが技術の向上というんですかね、丹波には若い人たちが轆轤（ろくろ）とか制作に関して力のある人たちがいるしやっています。昨年丹波からも久しぶりに正会員になられた市野秀作さんのように。そういう人が丹波からもっと何人も出てこれて、他の人たちに刺激を与えていただけたらなあと考えています。



清水一二氏 西端 正氏 市野悦夫氏

のこ出かけていったんです。西端さんの作品が日本工芸会総裁賞ということで、メインのところに置いてあって、そういう会場を拝見しながら、ここに並べてもらえるようになりたいなと思いつつ丹波に帰ってきた記憶があるんです。悦夫さんもおっしゃっていました。西端さんが総裁賞を取られたというこの前後の年、丹波というこの土地に、作家的な焼き物、陶芸家という認識が芽生え始めたのではないかと思います。

司会…ここ最近では、出品される方が少なくつてきておられますが、清水…私が30代ぐらいになった頃ですと、百貨店などで個展するというのがすごい憧れやっただけで、百貨店の美術画廊で個展をするためには「せめて支部展ぐらい通つてくたさい」と言われて。今の30代の人って、結構ギャラリさんからぼつと声がかかるので、伝統工芸展や日展に出して入選して会員だ会友だという看板を背負わなくてもいいという感覚になつてきていくのかなと思います。

市野…今は映像や画像であらゆる世界中の作品が見られますよね。抽象的な品物なり、幅広い評価を受けて、そういう人はさらさら公募展に出す意識もないやろし、それに画廊なり企画する側がアピールするなど選択肢が広いんですね。

清水…今はもう悦夫さんがおっしゃったようなSNSを使った発信っていうのを自分一人で作るから。ただ工芸会にいましたら、日本中のいろんなところの会員さんたちとお話をしますと、丹波という産地でやっていると知らないことはいっぱいあるわけです。同じものを作るにしてもアプローチの仕方が違うことを勉強させてもらう機会はあるって、そういう繋がりというのはいくらもなかった組織のものすごくいい部分だと思ふんです。

司会…今後こうあってほしいというふうな思いはありますか。

西端…私は、好きにやったらいいんじゃないかと思うんです。今の時代に合ったやり方で一杯やっけてほしいなあと考えています。それを長い間そういうことを続けること、丹波の伝統というのには生まれるのかなあと考えています。公募展に挑戦して入選したりすると大きい自信に繋がります。

市野…人間っていろいろの一面ではないから、機械文明が進むほど農業とかこういう素朴なものに惹かれる人が一部だけでもいる。やっぱりそういう人が続けてくれればと思います。

清水…こういう公募展や伝統工芸展に出すというのは西端さんがおっしゃったように通れば嬉しいです。少し落ちれば悔しいです。次どうしようと考えたりする、そういうメリハリをつけるための一つのツールなのかなという気がします。出す以上は入選したいわけですから、それに向かって考えます。それが技術の向上というんですかね、丹波には若い人たちが轆轤（ろくろ）とか制作に関して力のある人たちがいるしやっています。昨年丹波からも久しぶりに正会員になられた市野秀作さんのように。そういう人が丹波からもっと何人も出てこれて、他の人たちに刺激を与えていただけたらなあと考えています。

丹波篠山市在住 日本工芸会正会員			
名 前(案名)	認定年	受 賞	
初代 市野信水(信水窯)	1983	(1997逝去)	
西端 正(末晴窯)	1989	日本工芸会総裁賞 '89	
市野元和(省三窯)	1993	高松宮記念賞 '91	
二代 市野信水(信水窯)	1993		
ピーター・ハーモン	1994		
市野清治(丹泉窯)	1995		
市野元祥(壺市)	1996		
市野秀之(雅峰窯)	1997		
大上雅司(@窯)	1998		
市野悦夫(丹波@窯)	1998		
市野哲次(市野悟窯)	2000		
市野良行(寿庵)	2001	(2017逝去)	
清水一二(珀耀窯)	2006		
西端大備(末晴窯)	2009	(2010逝去)	
市野秀作(省三窯)	2019		

「丹波焼の匠たち」
丹波篠山市在住
日本工芸会正会員 作品展」
やきもの里情報コーナー
(兵庫陶芸美術館展示棟正面入口横)
令和2年9月6日～11月29日
<https://www.nihonkogakai.or.jp/about-yaki>

日本工芸会について
公益社団法人日本工芸会は、重要無形文化財保持者(いわゆる人間国宝)を中心に伝統工芸作家、技術者等で組織する団体。現在、工芸分野重要無形文化財保持者を含め正会員約1200名が所属。下部組織として全国9支部(東日本・東海・富山・石川・近畿・中国・山口・四国・西部)を置いて、各地方会員相互の連絡を密にするとともに、その地域の伝統工芸の向上発展に努力し、支部毎に研究会、研修会等を実施するとともに、毎年その地方の特色を生かした支部展を開催。又、伝統工芸の専門分野別の組織として全員を7部会に分け(陶芸・染織・漆芸・金工・木竹工・人形・諸工芸分野毎の研究会及び、年一回の部会展を開催し、伝統工芸技術の発展と向上のために活動。同会が文化庁・NHK・朝日新聞社と主催する日本伝統工芸展は、昭和29年から年一回毎年開催。日本伝統工芸展は、文化財保護法の趣旨にそって、歴史上・芸術上価値の高い工芸技術を保護育成するため開催される最大規模の公募展。同会は、このほかにも、重要無形文化財保持者を講師とする伝承事業や記録保存等を行うなど無形文化財(工芸技術)の保存・伝承及び公開に関する事業を推進し、その実績では、他に比較するものがない日本国内唯一の組織。昭和30年6月27日社団法人設立許可。平成23年4月1日公益社団法人移行認定。
<https://www.nihonkogakai.or.jp/about-yaki>

展覧会の見どころ

●テーマ展のご案内